

## NEWSLETTER

## ～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター (p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは? (p.1)
- ◆ 大人数の授業で学生の質問を促す  
Web サービスの効果的な使い方 (p.1)
- ◆ 授業支援に取り組む学生の育成  
オーストラリアのチュートリアル (p.3)
- ◆ アクティブラーニング部門とは? (p.4)

## ◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学 駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとり入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（網野）

## ◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでよ

り広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（網野）

◆ 大人数の授業で学生の質問を促す  
Web サービスの効果的な使い方

今回は、前号に引き続き、学生の質問を促す Web サービス「Slido」(<https://www.sli.do/>)の具体的な利用事例について紹介します。Slido は Web 上で学生が質問を共有すること、リアルタイムに教員が学生に質問することができるサービスです。本サービスは、講演やイベントにおいて質問を促すために開発されていますが、授業においても活用することができます。大人数の授業では学生が自発的に質問してくれることはあまりありませんが、ちょっとした仕掛けを入れることで、質問を促すことができます。そして、そういった質問が授業内容の深い理解につながっていきます。

以下では、教養学部で Slido を実際に利用された大学院総合文化研究科准教授の四本裕子先生と政策研究大学院大学教授の竹中治堅先生へのインタビューをご紹介します。インタビューでは、Slido を導入している講義の目的、Slido 導入のきっかけや使用方法、Slido を導入して感じたメリット・デメリット等についてお聞きしました。

## 四本裕子先生に聞く「Slido」を利用した感想

『心理』という講義の目的は何ですか。

一般教養科目ですから、心理学について広く理解してほしいです。特に、心理学は科学だということを学生に分かってもらいたいですね。

Slido 導入のきっかけは何でしょうか。

授業後、教卓前に集まる学生がとても多くて対応しきれないことに悩んでいました。履修者が数百人（履修登録者は約 630 名）と多く、教室が大

きすぎるため、学生は手を挙げて質問できない。授業後に質問しても、その質問と回答を教室にいる他の人に共有できない。TwitterやITC-LMSの活用を試みましたがニーズに合わず…。ラボの学生が教えてくれたSlidoがとてもうまくいったので、本格的に使い始めました。



四本裕子先生の講義の様子

*Slido* はどのように使用されていますか。

今は、質問機能だけを使っています。授業中常に質問投稿が可能な状態にしておいて、時折手元のiPhoneで質問を確認して、回答しています。東大の授業は105分と長いので、その時間が有効活用できているという感覚です。Poll機能\*などもあると聞きましたので、今後は使うかもしれません。使い方、教えてください。

\*リアルタイムに教員が学生に対して質問して、学生が回答する機能。

*Slido* のいい所を教えてください。

講義の最中に質問を受け付けて、質問とその回答を学生全員に伝えることができる、というのが最大のメリットです。他の学生の鋭い質問を画面上で見て、刺激を受ける学生も少なからずいると感じています。また、匿名というのも私はメリットだと思います。学生が質問をするハードルが低くなるので。

*Slido* を使って困っていることはありますか。

それが正直、ないんですね。

授業に関係のない質問が出ることにも不満はありませんか。

第1回、第2回あたりは茶化すような投稿も見られますが、「やめてください」と伝えたりまじ

めな質問だけを取り上げたりするうちに、学生さんも大人ですから、改善されていきます。だから、不満はありません。

*Slido* を導入して、生徒の反応はいかがですか。

毎回、かなりの数のコメントが上がっていて、反応は良いと思います。だからと言って受講態度が悪くなったとかいうのはないですね。

最後に、導入を迷う先生方に向けて、コメントをください。

受講者数の多い一般教養の授業では、すごくいい使えるシステムだと思います。だからおすすめです。他の授業でも導入してほしいという学生もいるので、導入を検討する価値はあると考えます。

(インタビュアー 鈴木健一郎、記事作成 北村優成)

### 竹中治堅先生に聞く「Slido」を利用した感想

『日本の政治』という講義の目的は何ですか。

日本の政治の現状と仕組みを、学生に理解してもらうことです。

その目的を達成するために、どんな取組みをされていますか。

レポート課題を出したり予習する文献を指定したりしています。また、学生の学びを補助するために、以前はFacebookのグループを作って、授業や課題に関する質問や意見を募集していました。しかし、Facebookを使う学生が少なくなっているのか、なかなか質問が集まりませんでした。

そのような状況で、なぜ*Slido*を導入されたのでしょうか。

昨年度の受講生に勧められたからです。今年度初めて導入しました。50名程度受講生がいますが、授業内容に関する質問や意見も出るようになって学生の反応もいいので、継続して使っています。

質問が出るようになった、というのが大きなメリットということですね。

そうですね。一度だけ*Slido*を使わなかった授業がありましたが、「いつも*Slido*で質問できるのに今日はできない」とじれったく思った複数の学生が、手を挙げて積極的に質問していました。学生の主体性も高まっていると感じています。また、私が無意識に用いる専門用語や前提知識について、授業中にリアルタイムで質問があると、学生目線で分かりやすい授業へと改善できます。

*Slido* のデメリットはありますか。

政治の講義ではセンシティブな内容を扱うので、匿名で利用するのは少しリスクもあります。無責任な発言が出る可能性もありますし、同一人物が匿名で連投することで、場が荒れる恐れも考えなくてはなりません。実名か匿名か迷うところですが、現在の講義では実名による質問に優先して答えるようにしています。質問の数は減りましたが、洗練された質問や意見が出るようになったので、実名利用もいい手ではないかと思います。



竹中治堅先生の講義の様子

**Slido** 導入を検討されている先生方に向けて、一言お願いします。

非常に良いツールだと思います。匿名や実名、モデレーション機能（回収した質問を教員側が取捨選択する機能）の利用など、様々な活用方法があるようです。使い方次第で全ての講義にメリットがあると思います。親切すぎるかもしれませんが、学生にとって質問しやすい環境を整えることは、講義をよく理解してほしい我々にとってもプラスに働くと考えますね。

(インタビュアー 田中真衣、記事作成 北村優成)

このインタビューは、アクティブラーニング部門がサポートしている学生主体の授業支援活動、**Slido for Active Learning** への参加学生たちによって行われました。

**Slido for Active Learning** では、授業への **Slido** 導入支援を実施しています。

(KALS・TA 池田晴紀、特任准教授 小原)

## ◆ 授業支援に取り組む学生の育成 オーストラリアのチュートリアル

今回は、オーストラリアの「チュートリアル (tutorial)」に着目して、大学で授業支援に取り組む学生 (TA やチューター (tutor)) の活動やその意義、育成のための支援体制についてご紹介します。

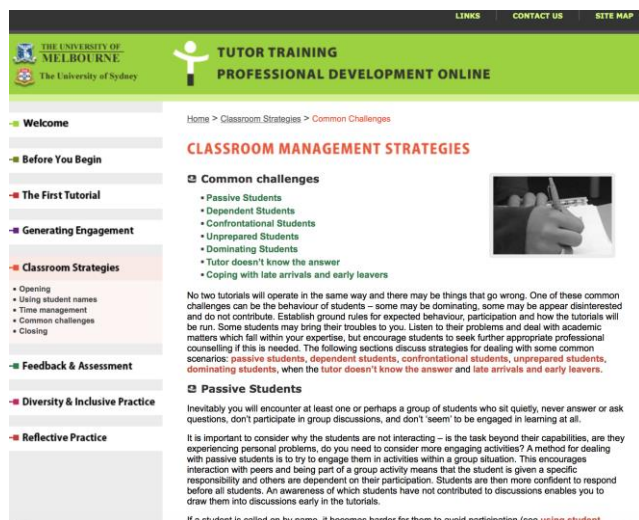
そもそも「チュートリアル」とはなんでしょう。か。「チュートリアル」とは、学生主体の授業を少人数の環境で行う教授形態のことを意味します (注 1)。オーストラリアの大学では、チュートリアルは講義を補うものとして位置づけられ、主に大学院生の「チューター」のファシリテーションのもと、10~30名の学生が講義やリーディング課題の内容に関する議論やグループワーク等を行います。チュートリアルは、「自由にディスカッションする機会や、学生の疑問や関心を追求する自由があり...講義で扱われた内容を自分のものとして内在化し、理解を深める」(竹腰2017, p. 127) 場として機能しています。また、ディスカッションを通して分析的思考や問題解決のスキルを身につける機会を提供することで、学生を自立した学びへと導く側面もあります。

一方、大学院生にとってチューターを務めることは、教える経験を積むステップになっています。チュートリアルにおいて、チューターは講義担当教員と学生をつなぎ、最も身近な指導的立場の存在として学生を助ける役割を果たしています。またチューターは、チュートリアル内外の課題の採点を行うなど、講義担当教員の負担を軽減する役割も果たしています。各授業では、チューターが課題を採点する場合にも一定の公平性が担保されるように、共通の評価ツールとしてルーブリック (注 2) が広く用いられるなど、チューターの活用を想定した授業設計が行われています。

チュートリアルにおいて鍵となるのは、チューターを担当する大学院生のファシリテーションの力量です。オーストラリアでは、ファシリテーションを個々のチューターの資質に委ねるのではなく、チュートリアル運営の参考になる手引きを発行したり、研修を実施したりして、チューターの育成を組織的に支援する体制を整えています。たとえば、メルボルン大学人文社会学部では、チューターになる大学院生のための手引きとして、「チューター・マニュアル」(注 3) を発行しています。またシドニー大学では、メルボルン大学との協同イニシアチブによって、チュートリアルで学生に主体的な学びをもたらすためのヒントを



体系的にまとめたウェブサイト“Tutor Training: Professional Development Online”（注 4）を開発・公表しています。



出所： <http://tutortraining.econ.usyd.edu.au>

これらの資料やサイトでは、学生の主体的な参加を引き出す各種問いかけの使い分け方やグループワークで生じやすい問題への対処法などが紹介されています。

では、チューターの育成を目的とした研修ではどのような取組みがなされているのでしょうか。新任チューターを対象とした研修では、まず最初にチューターの役割や心得、少人数教育に適した指導法などが講義形式で紹介され、次いで、講義で学んだ知識を活用したグループワーク（模擬演習）が行われるのが一般的です。たとえば、アデレード大学数学科が行なっているチューター研修では、チュートリアルに参加する学生一人ひとりが深い学びを体験できるように「主張の強い学生には、他の学生も尊重するよう忠告する」などといった授業を円滑に進行するためのポイントが紹介されています。このほかにも、メルボルン大学やシドニー大学では、各学部主導で、チューター同士が相互に授業を観察する機会を設け、改善点を見つけさせるピア・メンタリングを実施したりしています。

オーストラリアの大学に見られる講義と「チュートリアル」の 2 本柱形式の授業形態を日本の大学へそのまま導入することは現実的でないかもしれませんが、たとえば講義の参加者を少人数グループにわけ、大学院生のチューターを配置すれば、チュートリアル形式に近い授業を展開することは十分に可能です。これによって、講義担当教員はチューターと手分けして講義参加者全体に目

配りができるようになり、学生の学びの定着を図ることが可能となります。

以上で見てきたようなオーストラリアの大学の実践は、大学全体における学びの質の向上を図るためにも、参考にする余地があるのではないのでしょうか。

(KALS・TA 田中李歩、特任准教授 小原)

注 1：チュートリアルは、もともとイギリスの伝統的な大学で、少人数（1～4 人）の学生が教員との問答を通して知識の定着をはかるための場として発達してきた。竹腰千絵（2017）『チュートリアルの伝播と変容—イギリスからオーストラリアの大学へ』東信堂。

注 2：ルーブリックとは、課題を構成する要素について、評価の観点および尺度・基準を明示した採点表のこと。

注 3：The University of Melbourne (2013) *Faculty of Arts Tutor Manual*

[https://arts.unimelb.edu.au/\\_\\_data/assets/pdf\\_file/0003/1722405/foa-tutor-manual.pdf](https://arts.unimelb.edu.au/__data/assets/pdf_file/0003/1722405/foa-tutor-manual.pdf)

注 4：University of Melbourne and University of Sydney (2007) “Tutor Training: Professional Development Online”

## ◆ アクティブラーニング部門とは？

アクティブラーニング部門は学部教育を教育学の視点から支援することを目的として、2010 年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして 2007-2009 年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)「ICT を活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築-」を継承し、発展させています。また、全国の教育機関や教育関連の企業から年間 30 件余の見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

(奥付)

○発行年月日：2019 年 7 月 3 日

○発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門 網野徹哉・小原優貴・伊勢坊綾

○連絡先：[dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp)

○Web サイト：<http://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/dalt>